Title	サッカー文学の方法：ロア・ヴォルフの言語ゲーム
Sub Title	Die literarische Ästhetik Fußballspiels : Ror Wolfs Sprach-Spiele
Author	桑川, 麻里生(Kumekawa, Mario)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	1994
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.11 (1994. 3) ,p.63- 85
JaLC DOI	
Abstract	<p>1. Einleitung - Die Produktionsästhetik Ror Wolfs und der Sport als literarisches Motiv Der Schriftsteller Ror Wolf zeigt in seinem Werk immer Fragmente des Ganzen. Es gibt in seinem Prosawerk keinen normalen Zeitverlauf. In seiner Zeitbehandlung, in der der diachronische Geschichtsablauf mit Anfang und Ende nicht anerkannt wird, treten die synchronischen Differenzen an die Stelle des normalen Zeitverlaufs. Sport und Fußball sind für die Literatur nicht immer fremd gewesen. Andererseits hat Pierre Charton behauptet, daß Sport nicht mehr die Aufgabe hat, den Menschenkörper wiederzuentdecken. Wenn man sich nur für die fundamentalen Aspekte, z. B. Heiaentum, Leiden schafft, Solidarität, Neid, Ruhmsucht, interessiert, muß sich die Sportliteratur dem Sport als Sprachspiel unterwerfen.</p> <p>2. Die Form der Fußballtexte von Wolf Dies sind keine normalen Fußballbücher. Wolf hat die Sprechweisen von Spielern, Reportern, Kommentatoren, Zuschauern usw. aufgenommen und daraus Collagen gemacht. Obwohl es einige Kritiker gibt, die Wolfs Texte als zu intellektuell beurteilen, liegt doch der innere Wert der Fußballbücher in seiner Zusammenstellung von Collagen und in der Verschiedenartigkeit der Texte.</p> <p>3. Die Struktur: Reinigung von Metaphern Wolf zeigt die Fußballsprache in verschiedenen Stilarten, um in seinen Texten wiederzugeben, was es mit der Sprache wirklich auf sich hat.</p> <p>4. Fußball als utopisches Theater Das Wort „Utopie“ kann als ein Zustand definiert werden, in dem jeder aus allen Zwängen befreit ist. Das Fußballspiel ist eine konkrete Utopie, besonders für die Zuschauer und Fußballfans, weil sie, während sie die Fußballspiele sehen oder darüber sprechen, aus vielen alltäglichen Zwängen befreit sind. Jeder kann beim Fußball ein Experte sein. Die Wirkung des Spiels ist die Erfahrung außer Kraft zu setzen. Der Sport kann nicht immer ein echtes Spiel sein, aber man kann es als ein utopisches Spiel betrachten, Fußballspiele zu sehen und darüber zu sprechen. Durch seine Fußballtexte porträtierte Wolf die Masse, die als der einzige Held in der heutigen Gesellschaft verstanden werden kann. Das Collage- und Montageprinzip selbst hat den Leser aus dem Druck befreit, ein Buch vom Anfang bis zum Ende chronologisch durchzulesen. Die Fußballbücher Wolfs sind radikale utopische Texte.</p>
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-19940331-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サッカー文学の方法

——ロア・ヴォルフの言語ゲーム——

糸川 麻里生

1. はじめに——ロア・ヴォルフの文体実験と文学的モチーフとしてのスポーツ

1970年代にドイツの文体実験作家ロア・ヴォルフ(1932-)は一連の奇妙なサッカー本を発表した。これらは一般的評価という点で大成功をおさめたとはいえないが、その後のドイツにおけるサッカー文学、スポーツ文学を語る際にはしばしば言及される作品である。称賛と酷評、両様の評価を受けるこのサッカー・シリーズは、テキストの文体と構成の点で、きわめてユニークなものだった。そこでは、物語は語られないし、統一されたパースペクティブも存在しない。それはまた、ある特定のサッカー試合の結果を報告するものでもなければ、スター・プレイヤーの近況を伝えるものでもない。ヴォルフが行ったのは、サッカーという分野の中で語られ、印刷される、多種多様な言葉によるモンタージュやコラージュであった。

本論の目的は、この特異なサッカー・テキストを分析し、スポーツ文学の新しい可能性を探ることである。ヴォルフ自身が彼の方法論について語ることはまれだが、彼の実験は、スポーツと言葉の関係を考える際、ひとつの示唆を与えるものだ。

ヴォルフは最初の本格的散文作品『報告の続き (Fortsetzung des Berichts)』(1964)で実験的作家として注目を浴びた。ある食卓の光景と、語

り手であるところの「私」がその食卓につくまでに見た風景が描かれている(と読める)この作品中の述語動詞は、大半が現在形、その他わずかなものが現在完了形をとっている。そして、回想と現在、また各種の空間が共時的な動詞使用によって錯綜して描かれている。読者はこの作品空間の中をある程度自由に遊ぶことが可能だ。テキストの結末から冒頭へが連続するものとして読むこともできるように書かれており、作品の非時間的性質に強度を加えている。

『報告の続き』以後も、ヴォルフは文体を特異な方法で処理することによって一部のカルト的な読者によって支持されてきた。また一方で、絵画コラージュ作品を発表し続けたり、70年代および80年代にはラジオ劇を製作するなど、各種メディアへの関心、野心も見せ、マスコミには進歩的な書き手という印象を与えている。

しかし、そうした中でヴォルフに見られるのは、けして新しい文芸理論への欲求などではなく、むしろ一貫したコラージュ、モンタージュへの偏愛と、「脱権力」への志向だ。

「僕が興味があるのは、こんな本だ——。本棚から取り出し、気まぐれにページを開き、どこからでも読み始めることができる。そして、同様に、あとさきに何が書いてあるかなんてことにさしたる重要性を持たせず、いつでも出口を見つけることができる。そんな本。10ページ読んだら、本棚に戻す。また取り出して、5ページか2ページか読んだら、また戻す、そんなことができるような本」(ヴォルフ)¹⁾

ヴォルフはそのコラージュ・モンタージュの手法を、1950年代ドイツに流行したコンクレーテ・ポエジーの一派、とりわけヘルムート・ハイセンビュッテルから学んだと言われる。しかし、ハイセンビュッテルあるいはフランツ・モンらが、ナチス時代の後遺症による言語不信から出発し、文脈や文法から切り離された言語の「具象的要素」を素材とした言語実験を行ったのに対し、ヴォルフの主要な関心はあくまでも直接的に「社会」あるいは「現実」にある。

「結果がより重要だと思う。もっと正確に言うなら、僕の手法がどうやって出来上がったかなんて、知ったことじゃないのさ。いずれにせよ、それは出来上がったんだ。結果を見るべきだ。僕を魅了するのは、物語を引き裂き、イメージを切り刻み、それをふたたび組み立て、ふたたび壊す作業だ。ひょっとしたらその作業は、僕の意図の中では、自分を取り巻く世界に対して抱いている表象そのものなのかもしれない」(ヴォルフ)²⁾

とはいえ、ヴォルフは政治的な変革を要求する書き手でもない。1966年に彼は『私の前提 (Meine Voraussetzung)』と題した散文を発表している。その中でも彼は、絶えず交代する文芸理論を「たんなるプログラムとしてしか考えていない」と言明する一方で、「僕が固執する美学は一種類しかない。遊び、ナンセンス、まやかし、いつでも驚愕へと変わりうる楽しみ、そんなものに僕はこだわる。それは、「美しき魂」の文学やアンガージュマンの文学という枠には似合わないものだ」。³⁾

作家としてのキャリアを開始して以来、ヴォルフは一貫して、シリアスなものとしては顧みられることの少ないジャンルにおいて、社会を見出だそうとしてきた。大衆小説、マンガ、西部劇、デキシード・ジャズ、そしてサッカーと。その作品を「アバンギャルド」と評されることも多いヴォルフではあるが、「僕はいわゆるエリートのために書いているのでは絶対はない」⁴⁾と言い切る。最初のサッカー本『点は点 (Punkt ist Punkt)』が好調な売れ行きを示した際も、上機嫌で「僕にとって重要なのは、この作品で初めて僕のことをシリアスな文芸欄ではなくて、大衆紙や雑誌、スポーツ・マスコミに載ったということなんだ」⁵⁾と語ったものであった。

スポーツあるいはサッカーは、今世紀の文学にとってけして無縁のものであり続けたわけではない。サッカーやボクシングはチューリヒのダダイストたちにとって、生の統御されない力を表現する重要なモチーフだったし、ヨアヒム・リングルナッツの『体操詩集』(1974)にも、体操のみばかりかサッカーをテーマにした詩も収められている。また、ワイマール期の

カバレット詩人たちにとってもスポーツは魅力的な素材だった。

多少時代を溯っても、カフカの短編集『観察』(1913)に収録された「優勝騎手の追憶に」など、スポーツの熱狂を描いた文学テクストを見出すことは困難ではない。

むしろ、文学においてスポーツが大きな使命を果たしうる時代は終わった、という見解の方が現在においては優勢であるとさえ言えるかもしれない。ピエール・シャールトン⁶⁾は、1870年から1970年までのフランス文学史上でスポーツが演じた役割を著書『フランス文学とスポーツ』(1985)⁶⁾で詳述しているが、彼によれば、スポーツは「肉体の再発見という使命を果たし終えた」。スポーツのフマニズム、モラリズム、そして美学は、すでに語りつくされた、というのである。競技それ自体および試合というものに着目するかぎり、シャールトンの見解は正しいかに見える。今日において、スポーツが独自の美と芸術的価値を所有していることは自明のこととなっている。

しかし、スポーツとはオリンピックで行われるような競技だけにとどまるものではない。それは、きわめて広汎な人気を獲得した、大衆娯楽なのである。むしろそれゆえ、ドイツの知識人層にとって、スポーツはいまだなお問題をはらんだテーマなのだ。大衆社会の重要な一要素となっているにもかかわらず、それは学者、作家たちにとって単純な主題ではないのである。

ゲルト・ホルトレーダーは『フットボールの魅惑 (Die Faszination des Fußballspiels)』(1974)において、サッカーを「余暇の楽しみ」および「職業」という両面から社会学的に考察したが、その中でサッカー文学についても言及している。

学者たちよりも、作家たちがこのスポーツをひどくなおざりにしてきた。世俗に疎い文学者の無知からではない。また、文学とサッカーが無関係だからでもない。むしろ反対であって、両分野のあまりの親近性ゆえに、実りある出会いが困難になっているのである。(…)お

そらくそれゆえ、スポーツを題材に取った文学作品は、そのスポーツそのものよりも退屈なことが多いのだろう。⁷⁾

スポーツのもたらす基本的な諸感情、たとえば、英雄性、情熱、闘志、名声、嫉妬などのみに関わる限り、スポーツ文学は実際のスポーツに屈伏、従属せざるをえない。ロア・ヴォルフはこうしたスポーツ本の運命を明確に意識していた。

「サッカーの本は今までずいぶん出た。有名選手の自伝も含めてね。それに、スポーツ物語、スポーツ小説。いずれも伝統的なストーリーを追ったもので、ヒーローを中心にしたものだ。そういうものをやろうとは全然思わなかった。事後、物語とされてしまったサッカーは、実際のサッカーの試合の持つドラマ性やスリルにはけして及ばないと思うんだ」(ヴォルフ)⁸⁾

ヴォルフが書いたのは、「正当派」のサッカー本ではなく、サッカーの周辺に巻き起こる言葉、もしくは俗語を再構成したものだ。私の見解では、このユニークな試みによって表現されるのは、サッカーの英雄性や熱狂ではなく、その「ユートピア的」な性格である。また、彼のサッカー本自体が「ユートピア的」である。以下の論で、サッカー競技およびロア・ヴォルフのサッカー本のどのような点がいかなる理由で「ユートピア的」と呼びうるかを述べたいと思う。

2. ヴォルフのサッカー・テキストの形式

ロア・ヴォルフはサッカーを題材にした作品を3つ発表している。最初のもので、かなりの売り上げも記録した『点は点』(1971)。第2集『熱い空気 (Die heiße Luft der Spiele)』(1980)はその補遺集とでも言えるものであり、当時サッカー・ファンには好評を博したラジオ番組「ラジオ・コラージュ」のテキストも収録されている。そして3冊目の『一番むずかしいのはいつだって次の試合 (Das nächste Spiel ist immer das Schwerste)』(1982)は、前2冊の合本であり、若干の補充もなされている。

すでに述べたように、これらは通常のサッカー読み物ではない。現実の選手や試合がしばしば言及されるにもかかわらず、それらについてのレポートではないし、サッカー小説でもない。かといって、思弁的な「サッカー論」でもないのである。テキストは一貫して、サッカーを巡って流通する多種多様な言語をコラージュしたものだ。ヴォルフは各種メディアを通じてルポルタージュ、インタビュー、ラジオ速報などの言葉を収集する一方、カセットテープレコーダーを携え、選手やコーチ、ファンの声を録音して回った。そして、それらを素材として加工を行った結果、奇妙な、しばしば笑いを誘う作品が生まれた。

「僕はそれを1966年から1981年にかけて収集した。新聞やスポーツ紙、ラジオやテレビ、また当事者との直接の接触からね。つまり、選手、トレーナー、審判、レポーターたち、そしてなにより観客。あらゆるところに出向いた。客席の各所、苛酷な遠征試合のバスの中、ファン・クラブの集い、居酒屋、トレーニング・キャンプ。そこでは、本当のエキスパートに出会うことができる。この、けっして終わることのない全体劇場の天然俳優 (Naturdarsteller) たちにね。だから、僕の作品は声帯模写ではない。創作した言葉はないんだ。テープに録音した言葉に忠実な仕事をした」(ヴォルフ)¹⁾

集めた素材を、ヴォルフは実に多様な方法で作品へと仕上げた。「創作した言葉はない」と本人は語っているが、それぞれのテキストに「出典」が明記されているわけでもない。テキストの構造は、やはりヴォルフの「作品」と呼ぶべきものだ。ヴォルフは模倣をしたのではない。彼はサッカー言語の世界を新たに組み立て直したのである。

そこから生まれるのは、奇妙な人工の宇宙だ。緑の芝生の上で毎週土曜日に行われる営みはもはや直接的具体的なものとしてはそこになく、言語というメディアを通してのみ現れる。「楽しむこと、楽しませること、もちろんそれが目的だ。けれども、あくまでも言葉という手段のみを使って」(ヴォルフ)²⁾

さて試合開始早々、驚きました、ルップが中央、リユールが右サイド、どうしたことか、ゲックスが今回はボックスに回っております、またコッホも本来ならクラフトのいるべきポジションについています、どうやらルッツだけは彼本来のポジションにいるようではありませんが、その前方にいるはずのホーフを探しても見当たりません、彼はブルングスとポジションを交換したもようで、第2列、ヴィットの隣、マースの後、そして今日はプムスに代わって出場しておりますオークの前です、と申している間に逆サイドに回ってまいりました、そしてヘルトが左に行きます、ここでシュトウルムが中央からやってまいりました。ダメです、キークにはカークがマークについている、リユールにボールが回った、しかしポップにはつなげない、かわりにレーアが上がってこなくてはいけない、グレスがクレフに当たる、いや、ルッツが退がりました。カルプ中央、コッホとドウルツ、ヘルトが追う、ヴェストがホールの後に回る、ルップがポップにびったりマーク、しかし誰もいない、選手が中央に集まりすぎています、フェグヘルムの位置が悪い、しかしヴォルターがいいところにいた、うまく相手チームをひきつけています。(…)

(「静と動」：『点は点』より)

このテキストでは、あるチームの予想を裏切る布陣の様子が実況放送の文体で描かれているが、ここに登場するチームは実際には存在しない。作家ヴォルフガング・ヴェルトの評によれば、「テキストが言語外に存在する事物を指し示さないことによって、情報内容に向けられるのが通常である注意が言語それ自体に向けられる。その文章は、モデルとして提示されることによって、同じ形態の、しかし情報価値を持った文章の中に隠されたものを伝達するのである」。³⁾

ヴォルフのサッカーテキストは、ほとんどがウィットであり遊戯である。しかし、彼のテキストがもたらす娯楽は、我々が実際のサッカーの試合において享受するそれとは異なる。ヴォルフのサッカー本の読者は、サッカー言語に対する素朴さを喪失する。「ロア・ヴォルフはサッカーの興奮を弱めはしないが、毎週月曜の『興奮を読む興奮』を弱めるかもしれな

い。彼の本を読んだ後では、新聞のスポーツ面をすんなりと読むことができなくなるのだ」(ゲルト・ホルトレーダー)⁴⁾

ヴォルフのサッカー本の中には、いくつかの詩も含まれており、それはきわめて伝統的な形式にのっとっている。『点は点』に収録されたソネットの連作、過去13回のワールドカップ大会の試合内容を歌った脚韻詩群など、そこに用いられたサッカー言語の出所を云々することが困難なレベルにまで定形化されている。

Mit dem Fuß, so weit, so weit,	足で蹴られて、ぐん、ぐん、と
dort am Abend fliegt der harte	夕べに 飛ぶは 硬き
Ball, dort wo es schreit und	球, 歓声と 雪の中
schneit,	
steigt er auf und schwebt, der	昇り, 浮かぶ。淡きもの——
zarte	
aufgepumpte angestarrte	ぼんと浮かび 止まった
Ball rasch in die Einsamkeit.	球は たちまち 孤独の中へ
[...]	

(「最後のボール」:『点は点』より)

これらの定形詩の類をヴォルフは「厳格な形式と粗暴な内容との、また分割された詩句と、互いにぶつかり合う隠語とを結合する試み」⁵⁾と呼んでいる。ヴォルフはサッカー言語と詩作の双方を異化するのである。読本『文学的サッカー (Fußball literarische)』(1982)⁶⁾の編者でもある批評家カール・リハは、これらのテキストのシュールレアリスム的な性格に言及している。

描写された状況、およびその語彙からして、ヴォルフはこの分野に通じた「サッカー詩人」であると言えるだろう。彼は見逃された現実を文芸化している。同時に彼は、サッカーというものをソネットの中に持ち込むことで、このスポーツから距離を置き、それを分解し、隅々まで照らし出している。サッカーの隠語から聞き取られた語句はそれぞれ孤立し、まっとうな関連の中にあるとはしない。それは、情

動的な愉楽を搾取したなめらかに経過するルポルタージュではなく、単に引用され、モンタージュされたものなのである。⁷⁾

ヴォルフのサッカー・テキストにかなり批判的な評者も少なくない。ウルス・ヴィドマーはヴォルフの「ディレンマ」を、「お気に入りのおもちゃを分解してしまっ、ばらばらの部品の前で悲しげにしている子供のようだ」と評している。

これらの言語を諸要素に分解することは、なんらかの損失をともなわずにはいない。そうすることによって、美しきサッカーの世界も壊されてしまうからだ。サッカー言語を暴きたてて、なおかつフランクフルター・アイントラハトのファンであり続けるということは無理な相談なのだ。⁸⁾

ヴィドマーは、『点は点』中の最初の作品「裸の言葉を拡張する試み」のようなテキスト（はじめにサッカー用語の2つのグループを置き、次にそれらを用いた典型的な文例を作成し、さらに付加語や副詞を徐々に加えてゆき、最終的にはあるサッカー試合の状況が描出されるまでに「拡張」してゆく）を、「面白くない分析的文章」と呼び、「ヴォルフ自身がそこに遊んでいるテキスト」と区別している。

ヴォルフのサッカー・テキスト中、「文学的」なもの（モンタージュなど）ほど、私の反感はつもの。私は、私のサッカーの世界をヴォルフに荒らしてもらいたくはないのだ。⁹⁾

1968年にスペインのニコシアで行われたドイツ対キプロスのワールドカップ予選試合の際に、接続の悪い衛星回線を通してかわされた現地レポーターとTVアナウンサーとの噛み合わない会話を写生した作品「電話」などを、ヴィドマーは「分析的文章よりも成功した作品」とする。

A: さて、それではもう一度ニコシアにつないでみましょう。(受話器を取り)もしもし? / B: はいはい / A: ああ、つながりましたね。試合はどうなりましたか? / B: なんですって? / A: 試合はどうなった

かとお聞きしたんです。 / B: 試合? / A: そうです。 / B: どの試合
ですか? / A: えー, ですから, あなたが伝えてくださろうとしてい
る試合です。ニコシアでのワールドカップ予選ですよ。 / B: なん
ですって? / A: ワールドカップの予選です。 / B: ワールドカップ予選
ですか? / A: そうです。結果をごらんになったでしょう? / B: まだ
見終わってませんから, なんとも言いかけますが。 / A: なんです
って? 試合を見ていないんですか? / B: なんですか? / A: あなた,
試合を見ていないとおっしゃったんですか? / B: なんですか? / A:
接続が悪いようです。今日は実に接続が悪い。(A アナウンサー氏, 手
に何やら紙片を持ち, もう一方の手で受話器を耳に当てたまま視聴者
の方に向き直る。微笑みが消えている。) [...] A: さて, もう一度ニ
コシアにつないでみましょう。もしもし? / B: はいはい。 / A: あ
あ, いらっしゃいましたね。 / B: はい, 私はここにおります。 / A:
やっとお話が通じて, 嬉しいです。 / B: なんですか? / A: お話がで
きて嬉しい, と申し上げたんです。 / B: おっしゃっていることがよ
く解りませんが。 / A: こちらの声が聞こえますか? / B: いえ, よ
く聞こえていますよ。 [...]

(「電話」: 『点は点』より)

たしかにこの類の作品は解りやすく, 容易に笑いを誘う。しかし, ヴォ
ルフのサッカー・テキストの真価は, 一冊にまとめられた多くのコラージュ
が見せる多様性, テキストの多層性にこそあるのだ。「分析的文章」を
書くことに, ヴォルフのサッカーに対する否定的な態度を見ることはでき
ない。ヴィドマーの指摘した「ディレンマ」は, 少なくともヴォルフ自身
にとっては存在しない。ヴォルフはアバンギャルド的な散文を書く作家で
あるだけでなく, 彼が熱狂的に支持するチーム, フランクフルター・アイ
ントラハトの勝利に大金を賭けて失うこともできる, サッカー・ファンな
のである。今日もなお, ヴォルフはアイントラハトの熱心なファンであり,
選手全員と個人的に知遇があり, 同時に, このスポーツの知的処理のプロ
セスを確認してゆくことができるのである。

ヴォルフのコラージュ・モンタージュによるサッカー・テキストの価値

を「認識」するためには、あくまでも1冊あるいは3冊の本全体として眺めるべきであり、そのときはじめて、読者はサッカーの持つ「ユートピア的」性格が鮮明に描写されていることに気づくのである。以下、さらによくつかのテキストを検討するとともに、この「ユートピア的」なるものの性格を明らかにすることを目的に論を進めることにしよう。

3. メタファーの精錬

1863年6月にイギリスで近代スポーツとしてのルールを与えられたフットボール、いわゆるサッカーがドイツに伝播したのは、1872年のことであった。„トゥルネン(体操)“によってドイツ民族精神の鼓舞を目指したフリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン(1778-1852)の理論に従って、当時のプロイセン文化相グスタフ・フォン・ゲスラーが、青年男子によるスポーツ競技、とりわけ球技を奨励したことによるものだった。そもそも1806年のイエナ会戦でプロイセンが仏軍に破れるまでは、スポーツ競技はドイツ文化の中でさしたる位置を占めてはおらず、文学にとってはなおさらのことであった。

サッカーはイギリス伝統のスポーツであると言える。英文学においては、サッカーは重要なモチーフであったとは言えないまでも、少なくともかなり早くからメタファーとして用いられてはいた。チョーサー(1340-1400)は『騎士の話』の中で、打ち倒された騎士をフットボールにたとえているし、シェークスピアは『間違い続き』(1593頃)の中で、主人とその妻との間を慌ただしく行き来する召使いを“football”と呼んでいる。また、すでに16世紀には、英語の“football”は「密集する」という意味の動詞にもなってもいた。

もちろん、当時のフットボールは、今日のような近代スポーツではなかった。上述の通り、成文化されたフットボールのルールが作られたのは、19世紀になってようやくのことである。それまでのフットボールは広場や路上で無数の男どもがボールを奪い合う、はるかに暴力的な遊戯であっ

た。遊戯中にしばしば死人が出たため、14世紀以来、イギリスでは度々フットボール禁止令が出されたほどであった。

研究者の中には、ヨーロッパにおける蹴球の起源が未詳である理由を、この遊戯が異教信仰と関係があるものであり、中世においてはフットボールについて語るのが憚られたためではないか、と推測する人々もいる。あらゆる動きやテクニックに高度な洗練が加えられた今日でもなお、ヨーロッパ人にとってサッカーは特別荒っぽい球技だ。おそらくそれゆえに、1900年によく「ドイツ・フットボール連盟」が発足したという新しい遊戯であるにもかかわらず、ドイツの労働者階級において急速に人気を獲得し、いわゆる国民的スポーツとなりえたのである。

20世紀のドイツ語文学においては、サッカーは荒々しい群衆遊戯として登場した。チューリヒのダダイストたちやワイマール期のドイツ作家の作品に登場するサッカーは、人間の制御し切れない心的エネルギーのアレゴリーだった。その後、文化のますますの大衆化とともに、サッカーのこうしたイメージは使い古されてゆく。今日では、焼ソーセージと生温いビールの匂いが切っても切り離せないこの球技は、文学の主たるモチーフとしてはあまりにも通俗的なものとなってしまった。

しかし、1970年代に発表されたロア・ヴォルフの作品によって、サッカー文学は新しい段階に入ったと言える。そこでは、サッカーは何かのメタファーなのではなく、主題そのものである。サッカーをその全体像において表現するために、ヴォルフはまったく新しい方法を用いた。「『点は点』には、ひとつの統一されたパースペクティブは存在しない。[...]そこにあるのは、多様な視点のもとで適用されるモンタージュとコラージュの原理なんだ」(ヴォルフ)¹⁾。ヴォルフは収集したサッカー言語を、多様な文体の中で使用することで、この球技の周辺に流通する通俗的なメタファーの多義性、多様性を示し、サッカーを巡る言語ゲームが、意外なまでの宇宙性を持っていることを表現するのである。「世界はサッカーではないけれど、サッカーにはひとつの世界全体が見出だされることは、秘密でもなんでも

ない」(ヴォルフ)²⁾。

(...)前は全部開かれていて、ルッツは飛び込んで行った、そしてとうとうその孔を見つけた、ヘルタがいっぺんにその驚くべき裸体を示したからだ、エマはどろどろになって線上で踊る、けれども丁度その時ヘルタは抱擁から解き放たれ、ロッテはフリードリヒをふりほどき、エマは尻込みしたけれども、ディッケは深く貫き、願いを聞き届けられた僧侶は青白いヘルタがぐったりして抵抗しなくなるまで芝生の上を追いかけ回す、エマはなおも押し、また押し、ベルナルトはぬらぬらと濡れたモノを手から滑り出させ、すぐにフリードリヒがそれに飛びつくと笑いながら下半身に押し込み(...)

(「最後の闘志」:『点は点』より)

この一見ポルノ記事のような文章には、人名に関する注がほどこされている。

- エマ : ロタール・エマリッヒ, フォワード, ボルシア・ドルトムント所属
- ロッテ : ロタール・ウルザス, フォワード, アイントラハト所属, ブラウンシュバイク出身, 29歳, 178 cm, 78 kg
- ヘルタ : ヘルタ BSC ベルリン, 1892年7月25日創立, 構成人員1600名
- ディッケ (でぶ): ウーヴェ・ゼーラー, フォワード, HSV 所属, 33歳, 169 cm, 76 kg
- フリードリヒ: ユルゲン・フリードリヒ, ミッドフィールダー, FCカイザーラウターン所属, 26歳, 176 cm, 73 kg

このコラージュ作品では、サッカーがサディスティックな性的秘儀でもあるかのごとく描写されている。読者は、メタファーに満ち、絶えずサッカーの外部へとひろがってゆく語法が成立してゆくさまを目の当りにするのである。フィールド上の出来事を精密に描写しようとするほど、その言葉づかいは怪物的なものになってゆく。純粹にサッカーの試合を語った文章をポルノ小説にモンタージュすることで、文体、語り口が独立し

たものとなる。現実の試合が持っていたスリルや劇的要素は残滓としてしか存在せず、そのことによって作者はサッカー言語を成立させている文法を抽出することに成功するのである。

ヴォルフは、サッカー言語から、サッカー以外の物語をつむぎ出す材料に事欠かない。例えば、以下のような戦場のレポートもモンタージュされた。

(...)誰もが怖れるベヒトルトにとって、今こそその時だった。彼は十分に昂揚し、射撃に適った心境だった。今日は日和が良い、とも感じていた。3度、彼は雑踏に向かって撃った。そして、弾丸によってあらゆる憂慮を払いのけた。ヴァプラが倒れていた。今やいたるところ火の海だった。モーゼル銃はひび割れていた。ロイポルトは走り込んで穴を塞がねばならなかった。しかしそれももはやかなわず、モーゼル銃は崩壊したのである。(…)

(「ヴァプラの最後」：『点は点』より)

サッカー言語によって表現される戦場や性戯の表象が、実際のサッカー試合の持つ心理的動機とどの程度深い関係にあるのかをここで問う必要はないだろう。なぜなら、すでに述べたように、ヴォルフは「サッカーについて」の本を書いたのではなく、サッカー言語で遊んで見せたのだからである。重要なのは、彼の言葉遊びによって特殊な語法がその輪郭をより鮮明にしたということなのだ。

むしろ、注目しなければならないのは、ヴォルフがサッカー世界を構成するあらゆる分野の人々(選手、コーチ、マスコミ、ファン等)の発する言語にくまなく関心を寄せ、それぞれの言葉・文体の性格に即した、しかし一見風変わりな形式を与えていることである。

たとえば、ファンがスタンドで歓声とともに上げるさまざまな言葉は、伝統的な詩格の中にはめ込まれて、スタジアムにまき起こる古典的感情を暗示する。あるときはダクトウルス(揚抑抑格)による3拍子の連続が、観戦するファンの極端な喜怒哀楽をユーモラスに連ねて見せ(「目覚めよアイ

ントラハト!』:『点は点』), また別のテキストでは, 「ニーベルンゲン」を
思わせるようなヤンプス(抑揚格)によって, 英雄的なるものが, 誇張の中
でユーモラスに歌い上げられるのである(「トルコ軍来たる」: 同)。

さらに別の作品では, ファンの声はある酔っ払いの独り言の中にまとめ
あげられる。

なあ, なあおい, 何の話しだっけ, お前よ, あれだよ, あれ, しか
しテンポだな, なあおい, 誰がしゃべってたんだっけ, あ, そうか,
何だっけ? なに口笛なんか吹いてんだよ, この野郎, ウチ帰れ, し
かしまあ, いいや, いいってことよ, しかしいかな, (...)行けそ
ら, なんであそこで行かねえんだ, 突っ立ってやがる, ろくでなし,
なにやってんだかね? そうだ, ちょっとはいいぞ, いやそこだ, よ
し独走だ, あれまなんてこったい, このオタンコナス, わかんねえな
あ, 信じられん(...)

(「真実の瞬間」:『点は点』)

すでにここでは, 情報内容はまったく重要ではない。酔って TV のサ
ッカー放映を見ている男の, 典型的なサッカーファンの口調と, その無内
容こそがこのテキストの表現内容と言えるだろう。

『点は点』には, その他にも発言者を明記した「引用」と題されたペー
ジが8ヶ所にちりばめられ, それぞれあるテーマに沿って集められた発言
が, 必ずアイントラハト監督マックス・メルケルの最後の一言で「落ち」
をつけられるようになっている。

本来, ラジオ番組のためのテキストであった『熱い空気』には, 電波メ
ディアに乗ったサッカー言語のコラージュが多い。1978年のワールドカ
ップ大会で西ドイツとオーストリアが対戦した際の, 両国レポーターの愛
国的な絶叫を交互にコラージュした作品「コルドバ, 6月, 13時45分」
や, レフェリーを非難する観衆の声と, それに弁明するレフェリー本人の
インタビューを対置した具象詩的なテキスト「注目すべき判断」などは,
発表当時大いに人気を博した。

きわめて多彩な場所で、あらゆる人々からサッカーに呼びかける言葉を収集したことにより、ヴォルフはこのスポーツにおいて真のエキスパートはいない、もしくは全員がそれであることを巧みに表現して見せた。「全く、サッカーこそはこの世で唯一残った、誰もがエキスパートであり得、エキスパートとして互いに理解することがなお可能な『分野』なのである」(ハンス・クリスティアン・コスラー)³⁾。この、誰もが「エキスパート」として自由に発言できる、ということこそ、サッカー言語の「ユートピア的」な性格の重要な一要素である。

サッカーを語るためには多くの独特な言い回しが存在するが、それらはサッカーの外部から見たとき、全く新奇なものというわけではない。隠語と専門用語の入り交じったサッカー言語は、ヴォルフガング・ヴェルトの言うように⁴⁾、「規格化された表現および概念のレパートリー」なのである。基本的にかかなり限定された同じ語彙、同じ語法を用いるため、発される言葉はさほどの多彩さ、斬新さを持たない。ある同意のもとにサッカーについて語る人は、独自の言語を発しようとはしておらず、個として語っているのではない。集団に刻印された素材群の中から、自動的に引用し、構成を行っているのである。この点で、サッカーは社会における「儀式」であるといえる。

ヴォルフはコラージュ、モンタージュを通して、サッカーを巡って流通するメタファーや語法を巧妙に精錬した。そうして具体的な対象として取り出されたサッカー言語は、言語ユートピアを機能させる装置としての性格をあらわにするのである。

4. ユートピア的な劇場としてのサッカー

「ユートピア」という語の意を、あらゆるものが権力の毒から解放された状態と解釈してもよいだろう。そういった状況は現実の世界には存在しないが、その「ユートピア的」内容というものは、条件次第では可視のものとなる。ヴォルフがそのコラージュ作品によってポートレートを描いて

見せたサッカー言語の世界においては、このユートピア的な内容が実現されている。サッカーの試合について語っている限りにおいて、話者は多くの権力から解放されており、エキスパートとして、自由に言葉を発することができるのである。遊戯として外部から遮断されている以上、あらゆる表現が安全のうちに可能だ。

サッカーは世界ではないけれど、サッカーには世界を見出だせるということはもはや秘密でもなんでもない。それはしばしば馬鹿げた世界だ。感情の引き出しが絶えずひっぱり出され、さまざまな情動が一瞬にしてその反対側に送りこまれる。歓喜が落胆に、熱狂が怒りに、絶望がふたたび歓喜に。もちろん、そういったものを僕たちはすでに知っている。そして、サッカーを見ることでそれをより深く知るわけではないことも知っているんだ(ヴォルフ)。¹⁾

サッカー・ファンは、すでに知っていることを体験するためにスタジアムに行く。この、「サッカーを見る」という遊びには、奇妙な空疎さと自由があるのだ。ハンス・クリスティアン・コスラーによれば、それは「ファンタジーの解放」であり、このことによりサッカーは「ユートピアの素材」となる。

サッカーの試合自体をユートピアと見なすことはできない。ヨハン・ホイジンガは『ホモ・ルーデンス』の中でさまざまな遊戯形態を検討したが、「近代スポーツは真の遊戯からは逸脱している」とした。19世紀以来、スポーツは真剣になり過ぎ、あまりにも多くの鍛練を必要とするから、というのがその理由である。また、T.W. アドルノも、近代スポーツを「既成の生活基準へと人間を強制的にはめ込む資本主義時代の技術的で合理的でかつ業績に定位された産業労働を強化するもの」²⁾として弾劾している。実際、スポーツの目的はしばしば競技それ自体ではなく、金銭であったり、健康であったりする。しかし、遊戯のユートピア的内容は、それが祭のように自己目的的に行われる時にのみ達成されるのである。遊戯がその「外部」の世界と切り離されていなければ、遊戯者は世俗の権力か

ら解放されることはない。

ホイジンガの言う通り、今日のスポーツ競技は真の遊戯ではないかもしれない。しかし、「サッカー言語」という遊びだったどうか？ スポーツ試合の観戦者が行う言語遊戯は、真にユートピア的な遊戯とさえ呼びうるものではないか。この遊戯のユートピア的性格は、サッカー試合と、そこで用いられる言葉が外部の世界と本質的な関係を持たないところに発生する。プロサッカー選手が行っているのは遊戯ではなく職業であるが、その究極の目的がゴール以外の何物でもない時、「どのように得点に至ったか」ではなく「何点入ったか」という結果が最重要である時、すなわち「点(ポイント)は点」である時、その試合はユートピア的な契機を持つ。そして、それをめぐる言語遊戯はこのユートピア的性格を純化するのである。「点は点」である以上、スタジアムは言語のユートピアである。それらの言説は、叫び声のように、なんら特定の目的を持たないからだ。

遊戯と外部との断絶を考える時、ヴァルター・ベンヤミンの賭博 (Hazardspiel) についての記述が示唆に富んでいる。

賭博は経験の秩序を無効にする。おそらくその漠然たる感情がほかならぬ賭博者たちに〈経験の卑俗な援用〉を行わせるのだ。道楽者が〈わたしごのみの女〉と言うように、賭博者は〈俺の数字〉と言う。第二帝政の末期には賭博者の気分が蔓延した。「大通り(ブルヴァール)では誰もが万事を機会のせいにした」。賭がこの心的状態を助長する。賭は出来事に衝撃の経験を与え、出来事を経験の関連から切り離す手段である。

(『ボードレールのいくつかのモチーフについて』)

賭博とサッカーは同じ遊戯ではない。しかし、サッカーもまた「経験の秩序を無効にする」ことができる。つまり、観客はサッカーを見るために特別の経験を必要としないのである。サッカーを見ている間は、経験から、つまり外部の物語から解放されているのだ。

注目すべきは、フィールド上のサッカー選手が良いプレーをすればする

ほど、観客が解放される度合は大きい、という事実である。観客にとって経験を不必要なものとするために、逆にプロサッカー選手は経験を必要とするとも言えるだろう。さらに、2つのチームが観客の経験はもちろん、互いのそれさえ無力にするほどに好試合を展開した時、そこに現出するものこそ、「宿命」である。

仏の社会学者ジャン・ボードリアールは、必然と偶然の間に位置する宿命というものについて考察している。

偶発的な事故でみつける豊かな魅力と意味、偶発的な連なりのアイロニカルで悪魔的な喜び、それはカオス的な世界にはじめて因果の連鎖をつくりだした最初の知性の喜び、その喜びとまちががなく同等なものにすぎない。[...]我々はみな賭け事師だ。つまりわれわれの熱望するのはときたま合理的な鎖の結び目がほどけることだ。[...]偶然でもなければそのばかげた統計的客観性でもなく、まさにそこに何らかの驚きを期待すべきなのだ——偶然と必然とを同時に免れる術に。宿命的存在なお謎めき、事物の出現と消滅の秩序を命ずるある種の表現技術に。

(『宿命の戦略』：竹原あき子訳)

ヴォルフは、彼自身が「けして終わらない全体劇場の天然俳優」と呼んだ、サッカーの周りに集う人々の肖像を描くことで、ユートピア的な遊戯を全体としてとらえて見せた。コラージュ・モンタージュの手法を用いて、現代の唯一可能な主人公である群衆のポートレートを作ったのである。「もしホフマンがパリもしくはロンドンに足を踏み入れたことがあったならば、おそらく彼は市場だけに自己限定することはなかったろう。彼は女たちを中心に描くことはなかったろう。おそらく彼はポーがガス灯の光のもとに蠢く群衆から着想したのと同じモチーフを取り上げたことであろう」(ヴァルター・ベンヤミン)³⁾。

おそらく、コラージュ・モンタージュは群衆、大衆を描写するためには賢明な手法だろう。それは、これらのサッカー本を全体として把握しよう

と読者が試みた時はじめて明らかになることだ。だが、先述したように、ヴォルフは「なんとなく本棚から取り出し、気ままにページを開いて、後先に何があったか気にせず好きなだけ読んだらまた本棚に戻せるような本」を書いたのである。本を最初から最後に向けて順を追って読むことを強いる権力からも、ヴォルフは読者を解放しようとした。ヴォルフのサッカー本は多重に、むしろそれゆえにユートピア的なのである。

注

(略号について)

[A]=„Das nächste Spiel ist immer das Schwerste“: Haffmans Taschenbuch, Zürich 1990.

[B]=„Über Ror Wolf“: Hrsg. von Lothar Baier: edition suhrkamp, Frankfurt 1972.

[C]=„Anfang & Vorläufiges Ende“: Frankfurter Verlagsanstalt, Frankfurt 1992.

1. はじめに

1) [B] S. 154

2) [B] S. 150

3) [C] S. 59

4) [B] S. 141

5) [B] S. 139

6) ピエール・シャールトン 『フランス文学とスポーツ 1870-1970』 三好郁朗訳
法政大学出版局

7) „Die Faszination des Fußballspiels — Soziologische Anmerkungen zum Sport als Freizeit und Beruf“: Gerd Hortleder: suhrkamp taschenbuch 170 Frankfurt 1974.

8) [B] S. 139

2. ヴォルフのサッカー・テキストの形式

1) [A] S. 263

2) [B] S. 140

3) [C] S. 151

4) „Die Faszination des Fußballspiels“

- 5) [B] S. 263
- 6) „Fußball literarische“: Hrsg. von Karl Riha : suhrkamp, Frankfurt 1982.
- 7) [C] S. 174
- 8) [B] S. 63
- 9) [B] S. 66

3. メタファーの精錬

- 1) [B] S. 152
- 2) [A] S. 263
- 3) [C] S. 165
- 4) [C] S. 151

4. ユートピア的な劇場としてのサッカー

- 1) [A] S. 263
- 2) „Freizeit“ „Stichworte“: Theodor W. Adorno : Kritische Modelle Frankfurt 1969.
„Über einige Motive bei Baudelaire“ in „Charles Baudelaire ein Lyriker im Zeitalter des Hochkapitalismus“: Walter Benjamin suhrkamp 1974.

Die literarische Ästhetik des Fußballspiels

—Ror Wolfs Sprach-Spiele

Mario Kumekawa

1. Einleitung

— Die Produktionsästhetik Ror Wolfs und der Sport als literarisches Motiv

Der Schriftsteller Ror Wolf zeigt in seinem Werk immer Fragmente des Ganzen. Es gibt in seinem Prosawerk keinen normalen Zeitverlauf. In seiner Zeitbehandlung, in der der diachronische Geschichtsablauf mit Anfang und Ende nicht anerkannt wird, treten die synchronischen Differenzen an die Stelle des normalen Zeitverlaufs.

Sport und Fußball sind für die Literatur nicht immer fremd gewesen. Andererseits hat Pierre Charton behauptet, daß Sport nicht mehr die Aufgabe hat, den Menschenkörper wiederzuentdecken. Wenn man sich nur für die fundamentalen Aspekte, z. B. Heldentum, Leidenschaft, Soldarität, Neid, Ruhmsucht, interessiert, muß sich die Sportliteratur dem Sport als Sprachspiel unterwerfen.

2. Die Form der Fußballtexte von Wolf

Dies sind keine normalen Fußballbücher. Wolf hat die Sprechweisen von Spielern, Reportern, Kommentatoren, Zuschauern usw. aufgenommen und daraus Collagen gemacht. Obwohl es einige Kritiker gibt, die Wolfs Texte als zu intellektuell beurteilen, liegt doch der innere Wert der Fußballbücher in seiner Zusammenstellung von Collagen und in der Verschiedenartigkeit der Texte.

3. Die Struktur: Reinigung von Metaphern

Wolf zeigt die Fußballsprache in verschiedenen Stilarten, um in

seinen Texten wiederzugeben, was es mit der Sprache wirklich auf sich hat.

4. Fußball als utopisches Theater

Das Wort „Utopie“ kann als ein Zustand definiert werden, in dem jeder aus allen Zwängen befreit ist. Das Fußballspiel ist eine Konkrete Utopie, besonders für die Zuschauer und Fußballfans, weil sie, während sie die Fußballspiele sehen oder darüber sprechen, aus vielen alltäglichen Zwängen befreit sind.

Jeder kann beim Fußball ein Experte sein. Die Wirkung des Spiels ist die Erfahrung außer Kraft zu setzen. Der Sport kann nicht immer ein echtes Spiel sein, aber man kann es als ein utopisches Spiel betrachten, Fußballspiele zu sehen und darüber zu sprechen. Durch seine Fußballtexte porträtierte Wolf die Masse, die als der einzige Held in der heutigen Gesellschaft verstanden werden kann. Das Collage- und Montageprinzip selbst hat den Leser aus dem Druck befreit, ein Buch vom Anfang bis zum Ende chronologisch durchzulesen. Die Fußballbücher Wolfs sind radikale utopische Texte.

(慶應義塾大学大学院博士課程在学中)